

台湾原住民部落スマグスの社区營造における教会と住民組織の関係

- センス・オブ・コミュニティを用いて -

A Balance of Christianity and a Community Development Association in a Tayal's settlement in Taiwan

- Influence of Place Attachment in the Context of Sense of Community Theory -

佐々木孝子^{*} 星野 敏^{**} 橋本 禅^{**} 清水夏樹^{***}

Takako SASAKI^{*} Satoshi HOSHINO^{**} Shizuka HASHIMOTO^{**} Natsuki SHIMIZU^{***}

(^{*}京都大学大学院農学研究科 ^{**}京都大学大学院地球環境学学

^{***}京都大学森里海連環学教育ユニット/フィールド科学教育研究センター)

(^{*}Graduate School of Agriculture, Kyoto University ^{**}Graduate School of Global Environmental Studies, Kyoto University

^{***}Educational Unit for Studies on the Connectivity of Hilltop, Human and Ocean /Field Science Education and Research Center, Kyoto University)

I はじめに

1 背景と目的

台湾では社区総体營造計画(1994)以降、住民が社区^{注1)}単位の地域計画の作成や実施に参加する地域づくり手法(以下、社区營造^{注2)})が一般的に行われている。この国家計画が、地域性や民族アイデンティティの確立による地域発展を謳ったことから、原住民^{注3)}による社区營造でも伝統復興が志向されているが、長くマイノリティの立場にあった原住民にとって、これは容易ではない。日本統治時代と台湾政府による同化政策、並びに1950年代から進んだキリスト教への改宗が、伝統的生活様式を失わせ、祖霊信仰を否定するキリスト教の教義が伝統文化の衰退を加速したからである。先行研究においては、キリスト教会の関与による教育等生活の質の向上^{注4)}、或いは住民参加の阻害等^{注5)}両極端の報告があり、キリスト教が生活の新たな基盤となった反面、特に伝統復興においては一種のジレンマが見受けられる。しかし、アフリカ等では、キリスト教を自らの社会的文脈で解釈したり、伝統文化と使い分ける等の報告がある^{注6)}。他方、参加型地域づくり/開発に関する先行研究では、住民が地域づくりや開発に関わる実践を通じて、新しい技術や慣習法を自ら変容させ、適用していく過程を住民の主体性の確立としており^{注7)}、こうした制度や宗教と、生活との間に生じる変容は、住民が生活に即した形で社区營造の実践に主体的に関わる上で強力な武器となるはずである。

そこで本論では、社区營造における慣習法の変容を明示した上で、センス・オブ・コミュニティ(SOC)を用いて、社区營造に関わる各組織に対する住民の解釈による役割(以下、役割感覚とする)の相違を比較・分析し、現在課題化しつつある部落の現状に対する方策を考察する。

2 本論におけるSOCの援用と意義

SOCとは、コミュニティに対して人々が持つとされる多面的な意識の概念で、コミュニティの個々の成員が、他の成員と共有していると思っている意識の集合である。McMillanら^{注8)}による定義づけと因子分析による類型化^{注9)}以来、心理学分野では、コミュニティの意識尺度の開発が様々に進む他、Davidsonら^{注10)}がSOCと政治参加が正の相関関係にあることを解明し、石盛^{注11)}は、住民の主体としての意識は参加型地域づくりの実践において育つとして、愛着等地域に対するSOCと、自己決定・積極性等参加に関わるSOCが独立因子であることを実証する等、計画学分野と親和性のある研究が進んでいる。

一方、計画学分野では、住民の主体性に関わる意識、即ち、地域への思いの共有や、共同意識の醸成等、地域づくりに関わろうとする態勢(以下、態勢)の重要性は認識しつつも、その形成は住民に任されていたきらいがある。しかし、ここを把握し、住民の地域づくりへの関わり方を考えることは、行政・専門家等の関与のあり方を議論する上で必要であろう。態勢が整わなければ、住民は受け手のままで、外部からの支援を上手く活用できないからである。

この態勢を把握するには、SOCを用いた虫瞰的な分析が有効である。そこで、本論では、SOC研究を援用し、参加SOC・地域SOCを分けて捉えた上で、それらと社区營造との関係の考察を試みる。SOC尺度の台湾への応用については、Zhangら^{注12)}、Li^{注13)}等の実証研究、及び社区營造政策が日本の事例を参考に策定された経緯から類似点が少ない等により問題ないと判断した。ここではSOCを「社区營造を行う社区における、参加も含めた住民の意識の構成要素」とする。また、石盛^{注14)}等の他、Manzoら^{注15)}の、住民の相互作用により、愛着は個人的情動を越えて住民参加に

1 共同経営の概要

共同経営について、幹部へのヒアリング及び参与観察に基づいて簡述すると、この制度の発端は、1991年に開始した観光業の進展に伴う経済格差拡大による部落の人間関係

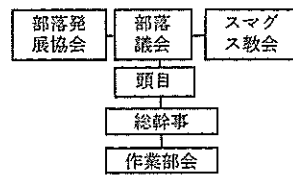


図2 共同経営組織図
Fig.2 The organization chart
(ラホイ¹¹⁾より作成)

の悪化と、観光参入を目的とする政府の外郭団体や民間業者による土地買収の動きが相まって、部落の瓦解さえ危ぶまれた1995年前後の状況にある。スマグスでは、1950年代の改宗以来、ほぼ全員がキリスト教徒で、共同経営体制は、幹部が、10年余の試行錯誤の末に、「頭目-作業集団」という伝統的な方式を再構築する形で作り上げたものである。即ち、共同経営は、住民組織として新たに設置された「部落議会(以下、議会)」と、従来からの「スマグス教会」「部落発展協会」が協働で行うが、部落のことは住民自らが合議で決定するとの主旨から、議会は頭目より上に位置付けられ、部落運営を牽引する。頭目は名誉職である。教会は、キリスト教会本部組織との橋渡し役である。部落発展協会は社区營造の規定に従って設立された組織で、交付金申請や折衝等、行政との調整を行う。「総幹事」と「作業部会」は、実務を担当する。加入者は人事部、農業土地部、民宿部等の作業部会に配属され、総幹事の統括の下、部落の生活環境整備、農作業、観光業等を行う(図2)。議会には、義務教育(中学校)修了後無料で加入でき、加入者には月例会議に出席する義務がある。ここでは、部落運営に関わる全ての事項について、幹部が報告すると同時に、加入者も自由に発言でき、意志決定は多数決による。議会と教会の成員は同じで、部落発展協会の成員は加入者の一部である。私有財産を認めず、全生活費を議会が負担するが、作業部会で働く加入者には、一律の給与(最低賃金程度)がある。調査時、部落に戸籍をもち、且つ居住する115人の内、90人が加入し、内46人が給与を得ていた¹²⁾。現在、観光業導入から関わってきた幹部(40代前後)に、選抜・育成された20~30代の住民が運営に加わっている(年齢は調査時)。

2 分析と考察

(1) 共同経営成立時における住民の態勢

部落の危機(Ⅲ-1)に際し、幹部は、人間関係の回復が第一と考えた。そこで「共食を思い出して(総幹事Y氏)」これを復活し、住民の生活を下支えしながら土地売却を阻止する方法を探る内に、慣習法を、共同経営として再構築するという方法を得たのである。三組織の協働体制によって、政府との軋轢や、信仰上の対立等、原住民部落がしばしば直面する政治的及び宗教的な問題を回避する一方で、

伝統行事である収穫祭・祖霊祭をキリスト教の感謝祭と融合して開催する等「共有」を生活全般に反映させ、分校を開校して独自の伝統文化継承カリキュラムを実施する等、戦略的に伝統復興を進めている。伝統的な様式を演出して可視化し、部

落内外にこの体制を認識させることで復興した伝統の正統性の獲得に成功したといえる。

共同経営は、33戸中31戸の同意を得て2007年に開始したが、ここまでの過程は、すべて幹部が進めてきた。ここで、共同経営の導入における、幹部と住民の共同意識の形成状況をヒアリングを踏まえてまとめると、以下の通りである。幹部は、共同経営の合意形成に向け、約1年をかけて戸別訪問と集会を重ねたという。一方、当時、多くの住民が人間関係の悪化を問題視していた。「共同経営に賛成した理由(n=31)」では、「生活向上に対する期待」「納得感」「貢献意欲」が他を上回った(表2)。回答者の属性とのクロス集計では有意の差が見られず、住民は共同経営について同程度に理解していたと思われる。共同経営に関する情報源(n=24)では、15人が集会、6人が家族、3人が「部落内で偶然聞いた」と回答した。集会欠席者や転入者には家族が伝達していた様子に加え、「偶然聞いた」3人が「(賛成まで)5回以上話しあった(項目2-c)」とし、非加入者が「何度話しても納得できなかった」と話す等、住民が幹部と十分に話し合ったと推察される。合意形成時、幹部と住民は共同意識を形成し、全体で共同経営の可否を自己決定したといえる。

(2) SOC構成要素の抽出

SOC関連項目について因子分析を行い、スクリープロットから4因子と仮定した後、因子負荷量と共通性で項目を削除し、最終的に18項目より4つの因子が得られた(表3:主因子法,斜交回転,4因子の寄与率61.99%)。因子負荷量0.5以上の項目に着目し、第1因子は、部落の向上に関わる自分の行動や思いに関する項目の負荷が高いことから、社区營造に対する「積極性」とし、第2因子は、部落や住民への思い等、地域との感情的つながり¹³⁾を示す項目から「愛着」を採用した。第3因子と第4因子は、日常のつきあいにおける表裏一体の感情と考えられ、それぞれ「面倒」、「互助」とした。Obstら¹³⁾は第3因子に含

表2 共同経営に賛成した理由
Table2. Reasons for agreement

理由(複数回答,カッコ内は回答数)	
自己決定	自分の生活が良くなる(15)
	部落全体の生活が良くなる(14)
	内容に納得した(18)
	部落に貢献したい(17)
	自分の意見も聞いてくれた(8)
同調的決定	幹部の考え方に共鳴した(8)
	幹部が良い人だから(5)
	発起人が幹部だから(5)
	幹部に専門知識があるから(2)
	部落内に賛成者が多かった(4)
強迫	親しい人が賛成したから(3)
	親しい人に誘われたから(1)
	幹部が賛成するよう言った(0)
	賛成せざるをえなかった(2)

1 共同経営の概要

共同経営について、幹部へのヒアリング及び参与観察に基づいて簡述すると、この制度の発端は、1991年に開始した観光業の進展に伴う経済格差拡大による部落の人間関係

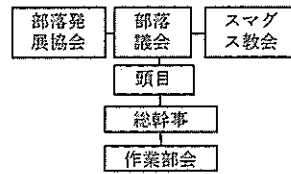


図2 共同経営組織図
Fig.2 The organization chart
(ラホイ¹³⁾より作成)

の悪化と、観光参入を目的とする政府の外郭団体や民間業者による土地買収の動きが相まって、部落の瓦解さえ危ぶまれた1995年前後の状況にある。スマグスでは、1950年代の改宗以来、ほぼ全員がキリスト教徒で、共同経営体制は、幹部が、10年余の試行錯誤の末に、「頭目-作業集団」という伝統的な方式を再構築する形で作り上げたものである。即ち、共同経営は、住民組織として新たに設置された「部落議会(以下、議会)」と、従来からの「スマグス教会」「部落発展協会」が協働で行うが、部落のことは住民自らが合議で決定するとの主旨から、議会は頭目より上に位置付けられ、部落運営を牽引する。頭目は名誉職である。教会は、キリスト教会本部組織との橋渡し役である。部落発展協会は社区營造の規定に従って設立された組織で、交付金申請や折衝等、行政との調整を行う。「総幹事」と「作業部会」は、実務を担当する。加入者は人事部、農業土地部、民宿部等の作業部会に配属され、総幹事の統括の下、部落の生活環境整備、農作業、観光業等を行う(図2)。議会には、義務教育(中学校)修了後無料で加入でき、加入者には月例会議に出席する義務がある。ここでは、部落運営に関わる全ての事項について、幹部が報告すると同時に、加入者も自由に発言でき、意志決定は多数決による。議会と教会の成員は同じで、部落発展協会の成員は加入者の一部である。私有財産を認めず、全生活費を議会が負担するが、作業部会で働く加入者には、一律の給与(最低賃金程度)がある。調査時、部落に戸籍をもち、且つ居住する115人の内、90人が加入し、内46人が給与を得ていた¹⁴⁾。現在、観光業導入から関わってきた幹部(40代前後)に、選抜・育成された20~30代の住民が運営に加わっている(年齢は調査時)。

2 分析と考察

(1) 共同経営成立時における住民の態勢

部落の危機(Ⅲ-1)に際し、幹部は、人間関係の回復が第一と考えた。そこで「共食を思い出して(総幹事Y氏)」これを復活し、住民の生活を下支えしながら土地売却を阻止する方法を探る内に、慣習法を、共同経営として再構築するという方法を導いたのである。三組織の協働体制によって、政府との軋轢や、信仰上の対立等、原住民部落がしばしば直面する政治的及び宗教的な問題を回避する一方で、

伝統行事である収穫祭・祖霊祭をキリスト教の感謝祭と融合して開催する等「共有」を生活全般に反映させ、分校を開校して独自の伝統文化継承カリキュラムを実施する等、戦略的に伝統復興を進めている。伝統的な様式を演出して可視化し、部

落内外にこの体制を認識させることで復興した伝統の正統性の獲得に成功したといえる。

共同経営は、33戸中31戸の同意を得て2007年に開始したが、ここまでの過程は、すべて幹部が進めてきた。ここで、共同経営の導入における、幹部と住民の共同意識の形成状況をヒアリングを踏まえてまとめると、以下の通りである。幹部は、共同経営の合意形成に向け、約1年をかけて戸別訪問と集会を重ねたという。一方、当時、多くの住民が人間関係の悪化を問題視していた。「共同経営に賛成した理由(n=31)」では、「生活向上に対する期待」「納得感」「貢献意欲」が他を上回った(表2)。回答者の属性とのクロス集計では有意の差が見られず、住民は共同経営について同程度に理解していたと思われる。共同経営に関する情報源(n=24)では、15人が集会、6人が家族、3人が「部落内で偶然聞いた」と回答した。集会欠席者や転入者には家族が伝達していた様子に加え、「偶然聞いた」3人が「(賛成まで)5回以上話しあった(項目2-c)」とし、非加入者が「何度話しても納得できなかった」と話す等、住民が幹部と十分に話し合ったと推察される。合意形成時、幹部と住民は共同意識を形成し、全体で共同経営の可否を自己決定したといえる。

(2) SOC構成要素の抽出

SOC関連項目について因子分析を行い、スクリープロットから4因子と仮定した後、因子負荷量と共通性で項目を削除し、最終的に18項目より4つの因子が得られた(表3:主因子法,斜交回転,4因子の寄与率61.99%)。因子負荷量0.5以上の項目に着目し、第1因子は、部落の向上に関わる自分の行動や思いに関する項目の負荷が高いことから、社区營造に対する「積極性」とし、第2因子は、部落や住民への思い等、地域との感情的つながり¹⁵⁾を示す項目から「愛着」を採用した。第3因子と第4因子は、日常のつきあいにおける表裏一体の感情と考えられ、それぞれ「面倒」、「互助」とした。Obstら¹⁶⁾は第3因子に含

表2 共同経営に賛成した理由
Table2. Reasons for agreement

理由(複数回答,カッコ内は回答数)	
自己決定	自分の生活が良くなる(15)
	部落全体の生活が良くなる(14)
	内容に納得した(18)
	部落に貢献したい(17)
	自分の意見も聞いてくれた(8)
同調的決定	幹部の考え方に共鳴した(8)
	幹部が良い人だから(5)
	発起人が幹部だから(5)
	幹部に専門知識があるから(2)
	部落内に賛成者が多かった(4)
強迫	親しい人が賛成したから(3)
	親しい人に誘われたから(1)
	幹部が賛成するよう言った(0)
	賛成せざるをえなかった(2)

まれる項目を逆転項目とし、第4

因子とともに「(コミュニティへの)所属意識」の1要素としたが、本事例では独立因子として得られた。「積極性」が参加に関わるSOC、「愛着」「面倒」「互助」は地域に関わるSOCである。「積極性」と「愛着」がそれぞれ独立因子となり、石盛の研究を支持する結果となった。4因子の信頼性係数 α は.879で、対象地のSOCとして妥当であると考えられる。因子間相関は、第1因子と第2因子で0.656、第4因子とで0.414と高い。

(3) 組織の役割感覚

II-4で触れたように、回答の素点平均値(表4)の差は、「問題があれば教会/議会が集会を開く」のみ有意で($t(34)=1.787, p<.1$)、住民の意識上には差異がない。成員が重複することで、相違の認識がないとも考えられるため、相関係数を用いてSOCの意識への影響を分析することで住民の会話(II-4)を読み解き、内在する両組織の対応関係を検討する。

4因子の因子得点と組織に対する意識・評価との相関分析を行った(表4)。積極性と愛着はどちらも両組織に対する意識・評価に対する相関が他のSOCより高く(表4: 星付部分, 面倒を除く)、当初の想定どおりであった。本節では、この2因子の相関係数を取り上げ、その比較により、SOCの両組織への影響を考察する。

まず、意識・評価に関する項目の相関係数の違いを用いて、2因子の相関係数を比較すると(表4: 縦枠, 破線部分)、10%水準で「部落を良くするのは議会に任せておけばよい($t(28)=1.785, p<.1$)」「(部落に)問題があれば議会

表3 SOCに関する因子分析結果(主因子法, 斜交回転)

Table 3 A result of factor analysis for SOC (Principal factor analysis, Promax rotation)

	1 積極性	2 愛着	3 面倒	4 互助	共通性	α
部落をよくするために自分の生活を少々犠牲にしてもよい	.996	-.202	-.110	.052	.861	
私は部落をよくするために積極的に意見を言う	.979	-.119	.185	.046	.861	
私は部落の未来に関わる重要事の決定にぜひ関わりたい	.752	.092	.002	.080	.739	
一生ここに住みたい	.656	-.091	-.206	-.016	.423	
部落をよくするには、住民が自分で決定することが重要だ	.648	.259	.221	-.103	.652	
部落内に困っている人がいれば自分に関係なくても助ける	.495	.322	.033	-.053	.514	
部落の人たちに仲間意識を感じる	.473	-.071	-.230	.336	.540	
この部落に愛着がある	.013	.981	-.113	-.164	.860	
住民は皆、部落の環境を清潔にしている	-.282	.805	.042	.087	.485	.879
この部落はほかにくらべて皆仲がよい	.123	.743	.032	.113	.786	
この部落のことを良く知っている	.291	.503	-.208	-.088	.508	
皆と違う意見を言ったら聞いてもらえないと思う	-.046	-.012	.787	.142	.614	
私は部落運営のための活動には関係ない	-.078	-.030	.569	.258	.345	
近所の人たちは騒がしい	-.026	-.165	.552	-.157	.402	
自分と家族の生活さえ良ければよい	.177	.187	.464	-.441	.407	
私が困った時家族/親戚以外に助けてくれる人がいる	.131	-.027	.241	.859	.851	
この部落の人たちは友好的だ	.082	.475	.128	.539	.845	
写真を見ればすぐにここだとわかる	.199	.196	-.266	.335	.463	

表4 因子得点と組織に対する意識・評価の相関

Table 4 A correlation of score of factors and sense of organization

	私は教会の一部分だと思ふ	私は議会の一部分だと思ふ	部落を良くするのは教会に任せておけばよい	部落を良くするのは議会に任せておけばよい	家族の問題は教会に相談する	家族の問題は議会に相談する
素点平均	4.06	4.11	3.41	3.26	3.49	3.29
積極性	**0.754	**0.753	0.273	0.192	**0.697	0.285
愛着	**0.626	**0.856	0.340	*0.431	**0.677	0.316
面倒	-0.014	0.066	***0.549	***0.492	0.244	0.216
互助	0.197	0.148	-0.028	-0.053	-0.004	-0.089
生活環境の問題は教会に相談する		生活環境の問題は議会に相談する	教会は生活を向上させる	議会は生活を向上させる	問題があれば教会が集会を開く	問題があれば議会が集会を開く
素点平均	4.03	3.97	4.29	4.11	4.06	4.32
積極性	**0.621	**0.662	**0.646	**0.589	**0.487	0.292
愛着	**0.522	**0.756	**0.487	**0.466	*0.451	**0.579
面倒	0.012	0.133	0.189	0.301	0.082	*0.395
互助	0.140	*0.366	0.209	0.314	*0.427	0.108

注1 ** $p<0.01$, * $p<0.05$

注2 積極性と愛着の比較において、太枠部分: 相関係数差 $p<0.05$, 破線枠部分: 相関係数差 $p<0.1$

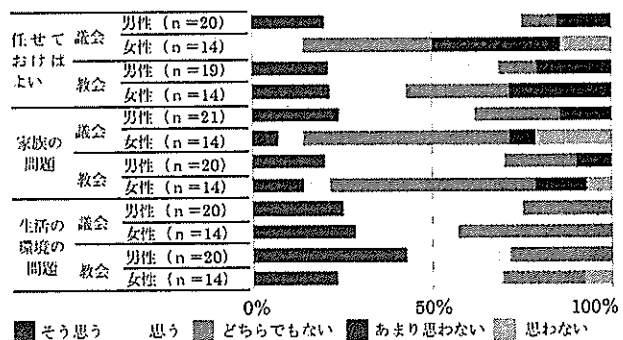


図3 性別と組織に対する意識・評価の関係
Fig.3 Sex-sense of reliance & trust cross tabulation

が集会を開く($t(28)=2.374, p<.1$)に有意な差が見られ、愛着の方が相関が高かった。集会に関するこの設問は、前出のObstらによるもので、組織の住民への関心度の評価である。愛着の強い住民ほど、議会に、住民を常に気に懸け、部落の問題を解決するという役割感覚を持っていると思われる。

次に、SOC 2 因子の因子間相関を用いて、意識・評価の項目と 2 因子の関連について見ると(表 4: 横枠, 太線部分), 5%水準で、積極性($t(28)=3.595, p<.005$), 及び愛着($t(28)=3.012, p<.005$)と「家族の問題の相談」の相関の差が、教会の方に有意であったが、所属感覚を意味する「一部分だと思ふ」では、愛着のみ、議会の方に有意な差が見られた($t(28)=3.173, p<.005$)。教会がプライベートな問題も相談できるほど近い一方、議会への所属感覚が高いことは、議会が、住民が意志を持って集まった組織であることを示唆する。以上から、教会が生活の拠りどころであるのに対し、議会は部落の問題を解決し、生活を良くする、換言すれば、社区营造のための組織として区別しており、そこには愛着が強く影響していることが浮かび上がった。加えて、面倒が、所属感覚で教会と負相関でありながら、住民への関心度では議会と弱い正相関を示すこと、及び、互助が、生活環境の問題の相談で、議会と弱い正相関であることもこの議会の役割感覚を支持しているといえよう。

なお、行政機関に関しては、面倒は「任せておけばよい」で強い正の相関がある他、愛着のみ「家族/生活環境の問題」について弱い相関を示した。これは、台湾で一般的に、里長等と個人的なコネクションがあることが生活上有利な場合があることによると思われる。共同経営は、明らかに行政とは一線を画す形で行われていた。

(4) 部落の現状と住民の現在の態勢

最後に、「任せておけばよい」の意味(II-4)を検討する。意識・評価項目と属性とのクロス集計では、性別との間のみ、「任せておけばよい」「家族の問題の相談」「生活環境の問題の相談」の 3 項目について有意な関連があり、男性の方が教会・議会ともに肯定的な回答をする率が高かった(図 3)。議会幹部(男性回答者 23 人中 6 人)が教会の幹部を兼務していることによるものと思われ、共同経営の中心が教会にあることが確認できる。また、幹部からは「部落は私たちがひっぱるべき」「よく話し合うことで、部落や住民のことを把握できているから、住民は安心だ」等の話があり、この回答は伝統的な男性のリーダーシップの現れでもある。しかし、参与観察で、月例会議中の出入りが激しい、或いは朝の打ち合わせの出席率が一定しない等の光景がある他、議会に加入すれば「全て面倒をみてくれるから楽だ」「飢えない」という話が年齢や性別に関係なく聞かれた。これまでの過程を直接には知らない若年層に、作業中の飲酒やサボタージュ等が見られることと合わせ、面倒 SOC が「任せておけばよい」で教会・議会とも強い正相関があるように、自分で考えることをしない依頼感である側面も否定できない。愛着に基づく議会への信頼感が「あなた任せ」感につながり、愛着が合意形成時の態勢の維持に必ずしも寄与しない可能性が懸念される。

IV まとめ

本事例においては、共同経営開始時には幹部と住民は共同意識を形成し、自己決定感を得ていた。社区营造の態勢は整っていたと推察される。また、検出された地域 SOC と、組織に対する意識・評価の相関係数を比較分析した結果、住民は、教会は生活の基盤、議会は社区营造という役割感覚を持っており、愛着がその感覚を支えていることが示される一方、愛着に基づく組織への安心や信頼等の感覚が、社区营造の態勢の維持に必ずしも寄与しない懸念があることが示唆された。

現在のスマグスは、インフラが整備されて情報が絶え間なく流入し、生活も物の考え方も、我々と同じように多様化している。若年層の問題に対して、幹部は従来の慣習法の倫理を論じがちだが、将来それでは住民の気持ちをまとめきれない場面もでてくるだろう。また、次世代幹部の選抜育成やリーダーシップ等、伝統でもある「幹部の力」が他の住民との意識の乖離につながり、部落の運営にそぐわない結果になる可能性も考えられる。共同意識を認識し、維持するには、努力が必要である。幹部が、今後も継続するであろう再構築を、決議だけでなく、その過程も含めて住民と共有する試みが望まれる。

謝辞

見ず知らずの筆頭筆者を快く受け入れ、調査にご協力くださったスマグスの人々に心から感謝を申し上げる。

注

- 注 1) 社区营造活動が実施される範囲を指す一般的用語であり、里等の行政区域と概ね一致する。
- 注 2) 社区総体营造策定の際(1994)「まちづくり」の訳語とされ、現在は参加型地域づくりを指す学術用語としての使用が一般的であることに倣った。
- 注 3) 原住民・部落：台湾で省庁等公式の場でも使用が認められた一般的な用語であることに倣った。
- 注 4) 定義：コミュニティの成員が帰属意識を持ち、互いの存在と属する集団を尊重し、共同意識を持つことでニーズが共有されているという相互信頼の感覚、類型：メンバーシップ・影響・統合と欲求の達成・共有された情緒的結合
- 注 5) 共同体の土地その他の財産を、共同体とその構成員が連帯して支配する形態
- 注 6) 本論では、頭目とその腹心から成る伝統的な社会組織を基盤とする部落運営のリーダー的な 6, 7 人の住民男性¹⁰⁾を指す。ヒアリングは総幹事、部落発展協会理事長、教育部会長に行った。

注7) 相関係数の同等性の検定を行い、次に母相関係数の点推定を行った。帰無仮説「母相関係数は全て等しい」対立仮説「母相関係数は異なる」をたて、k個の標本相関係数のZの変換値から検定統計量を求め、有意確率 α によって、帰無仮説の採否を決定する。帰無仮説が採択されれば、Z変換値の重みづけ平均値を求め、フィッシャーのZ変換の逆変換により、母相関係数の点推定値を得る¹⁵⁾。

注8) ヒアリングによる。非加入者は共同経営に反対す2世帯及び中学生以下の子どもで、給与がないのは高齢者・病人・他出中の学生という。

引用文献

- 1) 郭秀光(2001)：成功阿美的教会活動及其教育意義，台東師範学院教育研究所碩士論文
- 2) 佐々木孝子・星野敏・九鬼康彰・橋本禪(2011)：「台湾における原住民による社区营造の課題 - 台東県成功鎮三仙里アミ族の社区营造を事例に -」，農村計画学会誌，30，369-374
- 3) Luzar, J.B. & Fragoso, J.M.V. (2013): Shamanism, Christianity and Culture Change in Amazonia, *Human Ecology*, 41, 299-311
- 4) 例えば，藤田渡(2011)：ローカル・コモンズにおける地域住民の「主体性」の所在 - 実践コミュニティの生成と権力関係について，文化人類学，76，125-145
- 5) McMillan, D.W., & Chavis, D.M. (1986)：Sense of Community: A Definition and Theory, *Journal of Community Psychology*, 16, 6-23
- 6) Davidson, W.B., & Cotter, P.R. (1986): Measurement of sense of community within the sphere of city, *Journal of Applied Social Psychology*, 16, 608-619
- 7) 石盛真徳(2004)：コミュニティ意識とまちづくりへの市民参加：コミュニティ意識尺度の開発を通じて，コミュニティ心理学研究，7，87-98
- 8) Heng Zhang, Shih-Hsien Lin (2012)：Sense of Community in Taiwan and its Relationships with the Residential Environment, *Procedia-Social and Behavioral Sciences*, 35, 335-343
- 9) Chun-Hao Li, Ping-Hsiang Hsu & Shu-Yao Hsu (2011): Assessing the Application of the NCI to Community in Research in East Asia, *Journal of Community Psychology*, 39, 1031-1039
- 10) Manzo, LC and Perkins, DD. (2006): Finding common ground-The importance of place attachment to community participation and planning, *Journal of Planning Literature*, 20, 335-350
- 11) イチエ・ラホイ(2008)：是誰在講什麼樣的知識？Smangus 部落主体性建構與地方知識實踐，靜宜大學生態学系修士論文
- 12) ヤユツ・ナパイ(2009)：台湾原住民族部落スマグスにおける観光事業と多文化教育 - タイヤル住民の「部落を教室にする」実践 -，日本台湾学会報，11，177-198
- 13) Obst, P., Smith, S.G., & Zinkiewicz, L. (2002)：An Exploration of Sense of Community, Part 3: Dimensions and Predictors of Psychological Sense of Community in Geographical Communities, *Journal of Community Psychology*, 30, 119-133
- 14) Hidargo, M.C. & Hernandez, B. (2001): Place Attachment-Conceptual and Empirical Questions, *Journal of Environmental Psychology*, 21, 273-281
- 15) 複数個の相関係数の同等性の検定と母相関係数の点推定，<http://aoki2.si.gunma-u.ac.jp/lecture/Corr/corr4.html>，2004年2月5日，2013年5月9日

Summary : This is a case study of community development (CD) by the Tayal's settlement in Taiwan to clarify a relation between the council and the church, which lead CD in the settlement. Applying sense of community, we clarified differences of residents' consciousness between associations. First, we identified 2 dimensions of SOC: SOC for community-place attachment, support and annoying-, and SOC for participation-aggressiveness-. Next, we compared correlation coefficient of residents' consciousness and SOC. Results revealed that place attachment supported CD, while after solving a problem, it changed to a feeling of reliance to leaders and hamper to improve common feelings.

キーワード (Keywords): 台湾 (Taiwan), 原住民 (Indigenous people), 社区营造 (Community Development), センス・オブ・コミュニティ (Sense of Community), 愛着 (Place Attachment)

(2013年5月19日 原稿受理)

(2013年9月14日 採用決定)